

## 子育てコラム 39

### 性教育（命の教育） その3 「どこから生まれてきたの？」

20歳前後の学生200人ほどに、どこから生まれたか、どこで生まれたかを養育者から聞いたことがあるか尋ねました。半数以上が“橋の下で拾った”“キャベツ畑で生まれた”“コウノトリが運んできた”と言われたという返事でした。「はぐらかされた」と笑いながら答えてくれた学生もいました。家庭で正しく“どこから生まれたか”を聞いたという学生は極少数でした。

昭和の時代は“橋の下”が主流でした。平成の時代にも“橋の下”と言われてきた子どもが多くいることは意外でした。

私は、戦後の第一次ベビーブームから出生数が激減した合計特殊出生率2.4の時代に生まれました。ご近所との行き来はあり今より子どもは多くいましたが、近所で赤ちゃんのかわいい泣き声がしょっちゅう聞こえてくるような環境ではありませんでした。妊婦さんもあまり見かけませんでした。そのような中、小学生になって“橋の下で拾ってきた”と親から言われ、はじめは「まさか!」という思いでしたが、何度も言われると辛く悲しくなり、自分の存在を否定されたような、存在そのものがなくなっていくような気持ちになったことでした。そのようなことを友だちに話したり、聞いたりできるような時代でもありませんでした。成人してから、友だちもそのように言われていたということを知りました。

自分の出生について、“橋の下”や“キャベツ”と言われても、自尊感情が十分に育ち明るい子は大勢います。それでも子どもは“親の子”であることを確かめたいという思いが強くなります。さまざまなご事情のある家庭や、どうしても話せないという方もいると思いますが、子どもが辛い気持ちになる“橋の下”ではなく、親から生まれてきたこと、愛されて生まれてきたことを伝えてほしいものです。そのことが生きる力になります。

次回は「ではどのように伝えていけばいいか」を、絵本などの紹介とともにお話しさせていただきます。